

## ティムール家に關する一傳承について

間野 英二

中央アジアの生んだ世界征服者ティムールの生涯については、なお検討すべきいくつかの問題が残されている。ティムールの出自に關する問題もその一つであり、傳えられるティムール家の「系譜」の信憑性についてすら、なお定説が確立されていない情況にある。

ところで、最近タシュケントではじめて出版されたシャラフ・アッディーンの『勝利の書』の「序章」の *al-Muqaddima* を見ると、そこには「系譜」の信憑性を裏付けるかに見える一つの傳承が収録されている。それによれば、チンギス・ハーンの曾祖父にあたるカブルと、ティムール八世の祖のカチュェリとは、トゥメネ・ハーンより生まれた双子の兄弟であった。そして、この兄弟の間で、ハーン位はカブルとその子孫に、そして行政と軍事の實権はカチュェリとその子孫に屬するという一通の誓約書が交わされ、この誓約書は一三四〇年頃までハーン家の寶庫に收藏されて、實效を保ちつづけたという。つまり、これによれば、ティムールの祖先らは、常にハーンらを輔佐する重要な役割を演じつづけた事になる。

しかし、ニザーム・アッディーンなどティムール朝初期の歴史家達は、いずれもこの傳承を収録していない。それ故、この傳承を歴史的事實として認める事は、到底不可能といわねばならぬ。ただし、この様な傳承がティムールの歿後およそ二〇年の後に著わされ

たシャラフ・アッディーンの書その他に収録されている事實は、略奪者から世界帝國の支配者となりおこせたティムールの一族にとつて、一族の過去の日々をかざる榮光の物語が必要不可欠であった事を物語る。そして、この物語は、同時に、實權掌握後も單なるハーン家の女婿 *Kutagan* として、表面的にはハーンを輔佐して軍事・行政の諸事をとりおこなわねばならなかったティムールとその一族の立場を、明確に反映したものと見られよう。

## カイイムトゥウ文書補論

山田 信夫

W. Radloff/S. Malov が 'Uigurische Sprachdenkmäler, Materialien nach dem Tode des Verfassers mit Ergänzungen von S. Malov herausgegeben. Leningrad 1928' のなかで發表した一〇三點のウイグル俗文書類のうち、*Qiyintu* という名の人物に關するもの二點 (Nos. 10, 11) 'Qayintu' のもの四點 (Nos. 19, 20, 28, 37) 'Qarintu' のもの一點 (Nr. 27) があった。それはすべて Berlin collection のものであるが、原文書についてみると、みな同一名しかも同一人物 *Qayintu/Qay-yintu* であること、さらに同コレクション中の未發表資料のなかに同一人のものがなお九通あることもわかった。この計十六通のカイイムトゥウ文書の存在については、昨秋、第十四回内陸アジア史學會大會における公開講演で報告したが、そのときは、十六通が同一人物に關するものであるこ